

書評と紹介

野村一夫著

『インフォアーツ論』

——ネットワーク的知性とはなにか?』

評者：加藤 哲郎

本書の書評を気軽に引き受けたが、いざ執筆にかかると、困ってしまった。まずは内容ではなく文体である。並行して執筆中のマイケル・ハート＝アントニオ・ネグリ『帝国』（以文社、2003年）の書評の方は、いつもの「かたい」論文調で書けるのだが、そんな調子で語るのには、実践的な本書にふさわしくない。

おまけに本書については、インターネット上で、刊行直後に「オススメ本」として論評済みだ。評者のホームページ「ネチズン・カレッジ」1月15日号トップで、新年の北京訪問記中に用いた。半月毎更新だが1万人近くの眼に触れたはずで、こんな調子だった。

機中で読んだ、野村一夫さんの新著『インフォアーツ論——ネットワーク的知性とはなにか』（洋泉社新書）は、大変刺激的でした。野村さんは、ご存じのように、國學院大學経済学部教授であると共に、社会学サイトの定番「ソキウス」主宰者で、日本の人文・社会科学学術データベースサイト最先端の法政大学大原社会問題研究所OISR.ORGの制作者で

す。「インフォテックからインフォアーツへ——ネットの運命を握るのは眼識ある市民たちなのだ!」と帯にあるように、現在のインターネット世界を「大公開時代」と名づけ、1996年頃までの、比較的少数の専門家・研究者である先住民のみが交信していたウェブ世界に、大量のふつうの人々が爆発的に参入してきて、「ネチズン」の「先住民文化」が片隅に追いやられるようになった、といえます。つまり爆発的普及の段階では、「ネット市民＝ネチズン」や「シチズンシップ＝ネチズンシップ」の実体が大きく変わってきた、というのです。

何やら松下圭一が「市民社会から大衆社会へ」を説いた時のような問題提起です。そこでのキーワードが「自己言及性」「自己主題化」で、だれでも自由に発言する空間自体は飛躍的に広がったが、「自己言及の快感」は「論争の泥沼化」「知の格闘技」をも産み出し、ルールを守らない無法者が声高に跋扈する「銭湯的民主主義」「共有地の悲劇」も生まれてきている、というのです。野村さんがこう述べる背景には、2003年から始まる高校「情報科」の授業マニュアルが、古めかしい理工系情報工学の流れで作られ、インターネット時代の社会学・政治学・倫理学が反映されていない、という危機感があります。つまり、情報工学的文化である「インフォテック」に対して、ネットワーク時代に対応した知恵とわざと哲学である「インフォアーツ」が必要だ、という主張です。……

これで本書の内容紹介は、それなりに果たされている。そのうえネット上の論評では、もと

もと「先住民サイト」の一つとして出発した評者のホームページの「大公開時代」における変貌と、不正アクセス、ウイルス攻撃、いやがらせ・脅迫メール、迷惑メールへの愚痴が、延々と「自己言及」されている。2ちゃんねる風「掲示板あらし」にあった具体的体験を、本書でいう「ネットのマス・メディア化」「沈黙のらせん」「ネット世論の大きな振幅での激しい極論化」「リアルとバーチャルの境界の喪失」を使って「自己主題化」している。

だから、今では「ネチズン・カレッジ日誌」にデータベース化されている上記文章の、「野村さん」を「著者野村一夫氏」に、「です・ます」調を「である」調に直せば、評者の責めは果たせるはずだが、そうでもなさそうだ。インターネットという発言媒体の機制は、文体ばかりでなく叙述内容にも及び、日記風「自己言及性」が前面に出すぎている。

だが逆に、本誌は日本では先駆的にデジタル化されており、ウェブ上で同時公開される。歴史的活字史資料・画像のデータベース・サイトとして名高いため、これまでは学術論文調で書いてきたが、これからは「ウェブ資料の活字化・映像保存」の相互乗り入れもありうるはずだから、ネット私小説風でもいいではないか、五十嵐仁さんの連載「世界の労働関係研究所・資料館・図書館」だって、もともとネット上の日誌「諸国探検記」を見出しや注で化粧直ししたものだし——そう開き直ると、すらすらと文章が浮かんできた。

そこで、著者には一度しか直接お目にかかったことはないが、このさい「野村さん」で行くことにする。いつも「ソキウス」でお世話になり、メールを交換していると、どうも「野村氏」では書きにくい。おまけに素材はインターネット最先端の話、このさいわが「ネチズン・カレ

ッジ図書館・書評の部屋」にもぜひ収録・公開したい。いいですね、野村さん！——本書の貢献は、ウェブ上に氾濫する、こんなチャット風言説世界をサーフィンしつつ、アナログ社会学を「大公開時代」「ネット先住民文化の孤島化」「論争の泥沼化」「銭湯的民主主義」等々とデジタル時代の若者向けに翻訳して、サイバースペースが十分学術研究の対象になりうること、いや「大航海時代」に比すれば驚異的な速度で生活世界に浸透し、今や社会科学が避けて通れない「もう一つの社会」になっていることを、豊富な事例で実証したことである。本書の真骨頂で、伝統的アカデミズムへの挑戦である。

野村さんはこれを、自ら主宰する社会学の定番「ソキウス」、大原社研OISR.ORG、オンライン書店や生協への支援、それに情報教育の実践から導き、「リアルとヴァーチャルの二元論的世界観を中止すること。両者とも相互に反照しあって定義されるものであって、その境界を画定することは元々できない。その呪縛から自由になるべきだ」と宣言する。

わが意を得たり、である。評者は、五十嵐仁さんサイトから頂戴した「国際歴史探偵」の称号を励みに、インターネットを現代史研究に組み入れ、島崎藤村のお孫さんから届いた一通の電子メールをきっかけに、加藤哲郎・島崎爽助編『島崎翁助自伝 父藤村への抵抗と回帰』（平凡社）を昨年公刊した。鎌田慧さんと一緒に長く探してきた鈴木東民編集の戦間期日本語新聞『伯林週報』を、ホームページで呼びかけ発見したりしてきた（『幻の日本語新聞『伯林週報』『中管時報』発見記』『インテリジェンス』2号、2003年3月）。

9.11以降の戦争と平和の情報政治では、インターネットが主戦場になり、日本でも「小泉内閣メールマガジン」200万部は序の口で、「グローバル・ピース・キャンペーン」は2週間でネ

ット募金1250万円を集め『ニューヨーク・タイムズ』に意見広告を出し、ネットロア「100人の地球村」が活字になり120万部のベストセラーとなった事例を分析してきた（『現代日本社会における『平和』——情報戦時代の国境を越えた『非戦』』『歴史学研究』第769号、2002年11月、「9.11以後の情報戦とインターネット・デモクラシー」公共哲学ネットワーク編『地球的平和の公共哲学』東京大学出版会、2003年など）。最近の論文では、ネチズンの「ヴァーチャル」ネットワークが、2月15日に全世界1500万人の反戦行動をつなぐ「リアルな力」になったと報告した（『情報戦時代の世界平和運動』『世界』6月臨時増刊号）。

だが野村さんは、ネット世界特有の「思考やスタイルやフレームや文法」があることも見逃さない。それが第1章「大公開時代——自我とネットと市民主義」、第2章「メビウスの裏目——彩なすネットの言説世界」で、評者や二村一夫さん、五十嵐仁さんのように「大公開時代」に個人サイトから手探りで船出した者は、この間の体験・実感を社会的に整理して示され、「自己言及の快感」に留まらぬ知的充足と刺激を味わうことができる。

もっとも野村さんの積極的主張は、第3章「情報教育をほどく——インフォテックの包囲網」で現局面を憂いつつ、第4章「ネットワーク的知性としてのインフォアーツ」、第5章「着地の戦略——苗床集団における情報主体の構築」、第6章「つながらざる分散的知性——ラッダイト主義を超えて」で論じる代替案にある。

「インフォアーツ」とは、「インフォテック＝情報技術（いわゆるIT）およびそれにもとづく情報工学的文化」に対抗する「ネットワーク時代に対応した知恵とわざの総称」で、いうまでもなく「リベラルアーツ＝市民として自

律的に思考し行動するのに必要とされる基礎的な教養教育」の21世紀版ヴァージョンアップである。評者らが主張してきた「ネチズンシップ、ネチケット」より広く、「メディア・リテラシー」「情報調査能力」「コミュニケーション能力」「市民的能動性（ここに「ネチズンシップ」が含まれる）」「情報システム駆使能力・セキュリティ管理能力」まで含む総合的力能だ。

評者ならついでに、「異文化理解・交信能力」「グローバル・ネットワーク組織能力」を加えたい。ハート＝ネグリ『帝国』が、IT資本のネットワーク権力により身体・情報・情感まですでに管理されており、もはや「ノマド（遊牧民）的移動」と「エクソダス（脱走）」にしか民衆的「抵抗」はないとしているのに比べて、野村さんの「インフォアーツ」は、はるかに实际的で希望のある地球市民の対案ではないか！

だが情報戦には、「速度の政治」（P. ヴィリリオ）がつきまとう。「100人の地球村」のインターネット人口はなお10人程度とはいえ、5世紀前の「大航海時代」とは違って、「大公開時代」はわずか5年で「先住民文化」を孤島にした。「喜望峰」は見えてきたが、「インフォテック」はすでに「新大陸」中国・インド・アフリカをも占拠しつつある。急いで「インフォアーツ」を、グローバルに広めなければならない。

評者は本書を、今年の冬学期講義「情報政治学」のテキストにした。日本の学術サイト最先端・最重量のOISR.ORGを「インフォアーツのイージス艦」にして、世界の心あるネチズンを「インフォアーツ練習船」に試乗させ、船を出そう！ 本書は、そうした勇気を与える「汽笛一声」として、徹底的に活用さるべきである。（野村一夫著『インフォアーツ論——ネットワーク的知性とはなにか？』洋泉社新書、2003年1月、192頁、720円＋税）

（かとう・てつろう 一橋大学大学院教授・政治学）